ジャム

高綾まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジャム

【Ｎコード】
Ｎ７７３２Ｃ

【作者名】
高綾まり

【あらすじ】
ジャムを通した彼と私の日常。ジャムはアザであり血なのだ。

彼はブルーベリージャムが好きだ。
ずいぶん前、眼がよくなるってはやってから好きになったらしい。
だから彼が私を食べるとき、私は全身アザだらけみたいにされてしまう。
髪の毛もシーツもベタベタで大変なことになる。
「何か、変態っぽい」
「だってオレ変態だもん」
ジャムをなめながら言う。私はおかしくないけどくすぐったくて笑い声をもらす。
そしたら一緒にいる私も変態ってことになるのかな。

――　チンッ
「何かそれってヤダ」
こんがり焼けた食パンをお皿にのせて彼の前におく。
「いいじゃん。オレに対してだけ変態なんだし」
彼がブルーベリージャムをぬりながら言う。
それもそうか。

＊＊＊

私はイチゴジャムを冷蔵庫から取り出した。
大きなスプーンで山盛りにすくう。
レンジでちょっと温めた白い食パンに、落して広げた。

初潮を迎えたのは小学校４年生の１２月だった。
それから４か月たって５年生になった最初の体育の時間。女子だけが集められた部屋でビデオを見せられた。

「遅いと思わない？」
「何で急にその話？」
パンをかじりながら彼が言う。
「ん？　だって似てるんだもん」
ジャム広げたパンを彼に見せた。
「ほら、何か使用後のナプキンみたいじゃない？」
「いや知らないって」
ニガ笑いされる。
「こんど見せてあげようか？」
「えんりょしとく」
せっかくの提案を断られた。まぁ、あたり前か。
「でもね本当はユッケにそっくりなんだ。まぜてるときのヌメグチャっとした感じとか」
「へぇ、じゃあ味も同じか確かめてみよっか」
楽しそうに彼が言う。
私は彼の変態なところがちょっと好きだ。

（後書き）

初投稿です。
改行はもっとしたほうが読みやすいのかとも思いましたが、まずは自分の感覚で書いてみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7732c/

ジャム

2011年1月18日02時54分発行